

自律的な日本語学習能力

—工学系留学生に対する聞き取り調査の分析—

アブドゥハン恭子*

本研究は、留学生が自律的な日本語学習能力を獲得する援助をする教授法を開発することを目標に、自律的に日本語学習を行っていると思われる学習者にはどのような特徴があるかを、本人とその接触者への聞き取り調査によって検証したものである。14名の学習者から日本語能力の自己評価、日本語・専門科目の学習方法、学習環境への対応を聞き取り、その接触者による日本語能力評価も考慮に入れてそれぞれの事例を分析した。調査の結果、自己評価における問題認識、困難に直面したときの対処、コミュニケーションへの積極性において異なる、二つのグループに分けられた。各グループの特徴を分析し、自律的な学習技能の獲得を支援する教授法について考察する。

キーワード：自律的言語学習能力、聞き取り調査、言語学習ストラテジー

1. はじめに

本研究は、留学生が自律的な日本語学習能力を獲得する援助を行う教授法を開発することを目標に、実践的な日本語使用段階で、自分で自分の問題点を発見し学習を企画していくことができる学習者にはどのような特徴があるかを、本人とその接触者への聞き取り調査によって検証したものである。

学部や大学院に入ってくる留学生の日本語学習経験は一律ではないが、入学時に学習・研究活動に十分な段階に達している者は少なく、ほぼ全員が何らかの点で問題点を抱えている。また、学習技能の面でも、入学前の予備教育段階では授業や教科書で提示された内容の予習復習を行うという学習で有効であった技能を、大学での授業や活動に日本語を実際に使いながら鍛えていく技能へと変化させる必要がある。こうした状況への対応の成否は、学習者が自分で自分に必要な事項を認識し、可能な方法を案出していくことができるか否か、つまり、自律学習の技能を獲得できるかどうかにかかっている。そこで、専門基礎教育と並行して行われる日本語教育の場では、自律学習技能の獲得を援助することを主眼とした学習活動を計画することが重要となる。

自律的な言語学習に関しては、1970年代に学習者の役割を重視する考え方が顕著になり、「学習者が言語を習得するために使う自律的な手段」を意味する学習ストラテジーという概念を中心に研究¹⁾⁻³⁾が行われてきた。日本語教育においても1990年ごろから学習ストラテジー理論の紹介^{4),5)}が進み、学習ストラテジーや学習者の持つピループ（学習者の持つ言語学習に対するイメージや考え方）の調査⁶⁾⁻⁹⁾が行われ、学習者の特性¹⁰⁾についても種々の要素が分析されてきた。そして学習者の多様性に対応し、主体性を高めるために、目標設定から教材の選択、評価まで学習者が行う個別的な学習プログラムの提唱¹¹⁾や学習ストラテジートレーニングなどの実践研究¹²⁾もなされている。しかしながら、これらの研究の際に学習者の学習技能を分析したり自律性を測ったりする指標となっているのは、いずれも海外の研究で作られた質問紙を日本語教育用に作り直したもので、質問項目を構成しているストラテジーは重要度が均一なものでも、類型として定まったものでもなく、学習者の学習姿勢を全体として把握することが難しい。また、語学の学習ストラテジーに限らず、学部や大学院での学習環境への適応の態度を含めて分析することが、本研究の意図する教授法の開発にとって重要であると考えた。

*九州工業大学工学部共通講座助教授

2. 方法

調査の対象は、本学に学ぶ留学生とその周囲の人（以下、接触者とする）である。本学の留学生の典型的タイプとして、出身地・入学までの学習経験によって、次の4つを認識した：1)漢字圏出身の学部留学生、2)非漢字圏出身の学部生、3)直接入学の大学院生・研究生、4)予備教育修了の大学院生・研究生である。それぞれ、留学生本人と、留学生が日本語での接触が最も多いと申告した人にインタビューを行った。申告された人への調査が出来なかった場合には指導教員や先輩留学生などへのインタビューを行った。事例は合計14件である。対象者の身分、出身と日本語学習歴、接触者との関係を下の表1にまとめた。

質問項目は、本人に対しては日本語能力の自己評価、日本語・専門科目の学習方法、学習環境への対応などである。接触者には留学生との接触状況や留学生の日本語能力への評価を尋ねた。以上の項目を決めてはいたが、実際の面談では各項目に関連すると思われることをできるだけ自由に話してもらう形をとった。時間は本人には1時間以内、接触者には20分程度である。

3. 結果および考察

本人に対する質問項目に沿って、学習者の特徴を考察する。

3. 1 日本語能力の自己総合評価

次頁の表2に学習者の日本語能力についての自己評価と自己の日本語能力に対する問題認識を簡単にまとめた。自己評価については、おおむね満足しているか、まだまだ満足していないかで大きく二つに分かれた。接触者による評価も留学生の自己評価とほとんど一致していたが、特に日本語能力に問題のある学習者Aと学習者Lに対しては、接触者の評価はそれほど低くなく、入学時からの上達を評価する内容であった。

3. 2 自己評価における問題認識

自己の日本語能力についての問題認識としては語彙に言及する者が多く、大部分の学習者が自分の不足する語彙の分野について認識している。自己評価の高い者でも、よりの確に自分の言いたいことが言えるようになりたい、より精密に言い表す語彙がほしいという。そして書き言葉的な表現の必要性も感じている。問題認識の持ち方としては、総合評価の高い者ほど個別の問題認識が明確だと言える。さらに、自己評価の高い者の場合、自己の弱点を尋ねたときに実際のコミュニケーション場面で困難を感じたことを内省して答えた学習者が多かった。彼らは相手と話しながら自己モニターを働かせ、自分が意志伝達するときに思うようにいかないのはなぜなのか自覚している。（例：「適当な言葉が見つからないときに遠回りして話す（K）」「話しているときに文の接続部分など間違いがあるのが判っているが、そのまま話してしまう（M）」）そ

表1 タイプ別対象者の出身国・日本語学習歴とその接触者

	タイプ	学年	出身国	入学までの日本語学習歴		接触者（国籍）
				母国	日本	
A	1)	学1	マレーシア	予備教育2年間		友人（日本）
B	1)	学1	マレーシア	予備教育2年間		先輩（マレーシア）
C	1)	学2	マレーシア	予備教育2年間		友人（中国）
D	1)	学3	マレーシア	予備教育2年間		友人（中国）
E	1)	学1	ホンジュラス	—	予備教育1年間	—
F	2)	学2	中国	高校2年間	日本語学校1年半	チューター（日本）
G	2)	学2	中国	—	日本語学校2年間	友人（中国）
H	2)	学2	中国	中学高校6年間	他大学1年間	友人（中国）
I	2)	学3	中国	週3回1年間	日本語学校1年間	友人（日本）
J	2)	学3	中国	独学3ヶ月	日本語学校1年半	友人（中国）
K	2)	学4	中国	独学1年間	他大学1年間	指導教員（日本）
L	3)	D3	中国	—		指導教員（日本）
M	3)	M1	中国	独学1ヶ月		チューター（日本）
N	4)	M1	インドネシア	—	予備教育6ヶ月	先輩（日本）

れに対して、自己評価の低い者の場合は会話の場面で自分の日本語の使い方というような日本語使用上の評価はできない。

3. 3 日本語学習方法

インタビューした学習者のうち、次の二人の学習者が積極的に自分なりの日本語学習方法を案出しているように思われたので報告する。

Jは社交的な性格で、周囲の日本語環境に積極的に働きかけて会話運用能力の向上に努めている。具体的には、その日に出会った未知の語を覚えておいて後で必ず辞書を調べ、翌日日本人との会話にその語を使ってみて確認すると述べている。「間違ったら訂正すればよい、使わないと使い方が分からない」という言葉がこの学生の信念を表している。

Bは、話すことが得意であらゆる機会を積極的に使ってコミュニケーションの場を広げている。日本人の友人を作るだけでなく、無料のIP電話を使って日本人と知り合って話をし、手紙を書いたり、旅行をした際に案内してもらったりしている。講義では専門の言葉をできるだけその場で書いて記憶するようにしているという。日本語の授業においても、クラスによって、意見を出す練習をする、技術について知識を得るなど、

それぞれ自分の目標を設定している。その他、テレビやインターネットを通じてドラマを見るなど日本語を学習する機会を積極的に探している。

以上2名の学習者は共通して周囲の環境に積極的に働きかけて日本語コミュニケーションを構築しており、加えて、Jにおいては会話運用時の自己モニターの働きが、Bにおいては学習の企画能力が優れているといえることができる。

3. 4 専門科目の学習方法：困難に直面したときの対応

学部生の自己評価の高い者も入学当時の学習には大きな困難を感じていた。それは日本語能力の不足に加えて、専門基礎科目において講義を聴いて内容を理解し、知識を積み上げていくという学習技能を新しく獲得しなければならないからである。自己評価の高い者の日本語能力に対する評価には、この学習技能を獲得した自信が大きく寄与していることが窺える。

専門基礎科目で困難に直面した場合の対応の対処法として大きく2つある。まず、積極的な対処と言えるものがある。

- ・ 教師の板書を全部ノートに取る。教科書がわからなくても全部読む。それから母語で書かれた参考書を読む。そしてまた日本語の教科書を読み返す。(D)
- ・ 日本語の教科書を読んで、分からなかったらインターネットで調べてまた教科書にもどる。(E)
- ・ 教師の話がわからなくても寝たりしないで、知っている単語を拾いながらとにかく聞く。帰宅して教科書を読み返す。(K)

このように一語一語の理解からのボトムアップ的理解ではなく、全体を見通して個々を理解していくトップダウンの方法を案出して体験している。それに対し、レポートを見せてもらったり、インターネットで調べて丸写ししたりして、その場限りの消極的と言える対処をしている者もいる。

3. 5 コミュニケーション構築の積極性

前項においてBが日本語を使用する機会を積極的に作っていることを観察したが、この点でも大きく2つのグループに分けることができる。

表2 日本語能力の自己評価と問題認識

	自己評価	弱点、習得・上達したいこと
A	×	話すこと
C	×	話すこと 話す機会・話題がない 漢字、文法
G	×	きちんと話すこと：敬語表現、文法書く力
H	×	語彙 限られた範囲でしか話さない
I	×	語彙：生活上 センスがなくて上達しない
B	○	語彙：専門、方言 漢字を書く
D	○	スムーズに話せるように 語彙、書き言葉表現
E	○	社会生活上の語彙 言いたいことが十分に言えるように
F	○	語彙 深いことが話せるために 社会生活上の表現
J	○	書く力 文章表現
K	○	言いたいことが十分に言えるように 文章的な語彙・表現
L	×	研究上の日本語
M	○	専門の語彙、より自然な表現 書く力
N	○	専門・日常両面の語彙、話す機会

留学生は日本語の上達、あるいは上達の難しさの原因を環境に帰することが多い。概して日本人は自分から留学生に話しかけることが少なく、友達になるのが難しいというが、日本人とのコミュニケーションをレポートの添削や、サッカーの相手など、自分の意志でその場限りでないコミュニケーションを構築している学習者がいる。それに対して、日本語が下手なので日本人学生とあまり話せない、話題が作れないと答えたり、おおよその意思疎通はできるからそれでいい、と分からないことがあっても聞き流したり、深いことは話せないでそのような話題を避けたり、コミュニケーション構築に際して消極性を示す者がいる。

これまでの結果を表にすると下の表3のようになり、大きく2つのグループに分けられる。グループIIは自分の日本語能力に対する総合評価が高く、日本語学習方法案出や専門科目の対処法、コミュニケーション構築の面でも積極性が見られ、自律的な学習能力を身につけていると考えられる。それに対してグループIは自己評価が不十分だけでなく、様々な面で問題を抱えていると思われる。

3. 6 グループIのコミュニケーション上の問題点

この項では問題点を明らかにするため、グループIの事例を出身別に挙げて、そのコミュニケーション上の特徴を分析する。

3. 6. 1 非漢字圏学部生の事例

AとCは、入学時の日本語能力が不十分で大学での日本語環境に対して不安が大きく、充分ゆとりをもってコミュニケーションできていないことが察せられる。

Aは日本人学生とよく行動を共にしており日本語使用機会が多いが、質問の意図を一度で聞き取れない、言いよどみやフィルターが多く、短文や未完結の文が多いなど、日本人学生の理解に頼った形でコミュニケーションを成立させていることが窺える。学習者3は専

門基礎科目の内容を理解することに精力を傾けていて、自分から日本語を発信していく余裕がない。

3. 6. 2 漢字圏学部学生の事例

自ら日本語の力が変わっていないか低下したと評価している学生である。特に文法を忘れたと答えたGとIは構文的な化石化が見られる学生である。

Gは日本語を話す機会が少なく、正確に話す力や書く力が低下したという。普通体・丁寧体の切り替えや待遇表現が使えず、助詞や受動態など文法に不安があると述べている。筆者の日本語の授業を受けていた1年次には語の意味の正確な把握や、相手の意図を読む力に欠けている面が見られた。

Iは日本語能力がかなり高く、積極的にコミュニケーションをとる。語彙も豊富で内容的に深いことを話すことができるが、構文的な自然さに欠けている。本人は相手の意図を詮索しながら話さない、正確に話そうとしてもできないのであきらめて気にせずに話しているという。伝達内容や自分の主張をすることに重点を置いて、形の分析や正確さに意識が届いていない。

Hも日本語能力はかなり高いが、自己評価は高くない。生活面でも専門においても言葉が不足し、限られた語彙の範囲でしか話していない、深い話ができない、未知の語や不明なところは聞き流し、難しい話を避けていると述べている。筆者の日本語授業を受講していた1年次には文法的な誤りは少ないが、自分の意見や考えの表出に弱い面が見受けられた。

3. 6. 3 問題点のまとめ

以上のような事例から、コミュニケーションを阻害している要因としては、コミュニケーションの構築自体を避ける消極性と、発話の正確さ不足の2つが大きく挙げられる。前者は自己の日本語能力に対する不安に起因し、後者は日本語能力の不足から来る発話時の精神的余裕の不足、自己表出の優先、聞き手の意図を

表3 各学習者の特徴と、認識されたグループ

(-は特に言及なし)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
日本語能力の自己総合評価	×	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×	○	○
日本語運用時の自己モニター	×	○	×	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○
日本語学習方法の案出	×	○	×	○	○	-	×	×	×	○	○	○	○	○
専門科目での困難への対処法	×	-	×	○	○	-	×	×	-	-	○	×	○	○
コミュニケーションへの積極性	×	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○
グループ	I	II	I	II	II	II	I	I	I	II	II	I	II	II

理解する力の弱さなどに起因していると考えられる。

4. 自律的な日本語学習能力において重要な言語学習ストラテジー

ここで、自律的に日本語学習を行っていると考えられるグループⅡの日本語学習への態度を言語学習ストラテジーの観点から分析する。

言語学習ストラテジーとは「学習者が言語を習得するために自律的に使ういろいろな行動」である。オックスフォード³⁾は学習ストラテジーを次の6つに分類している。

直接ストラテジー

- ・ 記憶ストラテジー (より効果的に覚える)
- ・ 認知ストラテジー (全ての知的過程を使う)
- ・ 補償ストラテジー (不足した知識を補う)

間接ストラテジー

- ・ メタ認知ストラテジー (自分の学習を評価する)
- ・ 情意ストラテジー (感情をコントロールする)
- ・ 社会ストラテジー (他の人と一緒に学習する)

ネウストプニー⁵⁾はこの分類にヒエラルキーを主張して、3つの間接ストラテジーが「習得のための基礎構造の役割を果たし、これによってインプットが容易に得られ、そのインプットに他の学習ストラテジーを適用するか、自動(無監督)習得を行う」と述べている。

本調査の結果から学習者によって報告された学習ストラテジーの具体例を挙げると以下の通りである。

- ・ 積極的に機会を探してコミュニケーションを試みる(社会的ストラテジー)
- ・ 自分なりの学習方法を案出しようとする(メタ認知ストラテジー)
- ・ 会話運用時に自己モニターを働かせて問題点を認識する(メタ認知ストラテジー)
- ・ 困難に対処するとき全体的な把握に努める(認知ストラテジー)
- ・ 覚えた言葉をすぐに使用してみる(記憶ストラテジー)

学習環境の構築の面での社会的ストラテジー、メタ認知ストラテジーの重要性がこの聞き取り調査からも観察された。また情意ストラテジーは観察されなかつ

たが、専門科目での対処に成功した学習者にはその自信が感じられ、社会的ストラテジーの使用にも日本語能力への不安や自信が関係するなど、情意面の重要性が認められた。直接ストラテジーにおいては、意図を把握する、表現を分析・推論するなどの認知ストラテジーが、専門基礎科目での学習においても、日常での日本語使用においても重要な活動となっていた。

5. 教授法への示唆

自律的な日本語学習能力を獲得する援助となるような授業とは具体的にどのようなものだろうか。

自律的学習というと学習者に目標設定や教材選択を求めて自己評価表や学習観察記録などを通して学習カウンセリングを行う¹³⁾という形が代表的であるが、大学における日本語教育では多様な学習者が共に同じ課題に取り組むことから得られる教育効果が大きいのではないだろうか。学習者が大勢の中の一人として学ぶ中から自分の問題点を認識し、克服する経験をすることが、大学・大学院での活動に必要なだと考える。

グループⅠの学習者に社会的ストラテジー、メタ認知ストラテジーを活性化させるには、この聞き取り調査を元に自分の学習環境や学習方法をチェックするアンケートを作って実施したり、問題のある事例を元に学習環境への対応を話し合う授業を設けることも有効であろう。また、専門基礎科目での成功者のストラテジーの紹介や専門語彙へのアクセスの方法、日本人学生への働きかけ方などの情報提供など、日本語学習以外のサポートも有効であろう。

前章での分析において、直接ストラテジーの中で認知ストラテジーの重要性が観察されたので、教室活動としては、情報の受信と発信、分析と推論、実践上の正確さの練習を重点的に考える必要があるだろう。そのためには、聞きながらメモをとる、資料を見ながら聞き取る、メモに基づいて話す、など複合的な技能の練習が考えられる。このような複合的な技能の養成を最終段階として、学習環境への適応に配慮しつつ様々な教室活動を入学当初から提供していきたいと考えている。

今後は、上に述べた学習プログラムを実践し、学習者の自律的な学習技能の向上につながるかどうか検証

していきたい。

謝辞

今回の調査に快く協力してくれた 14 名の留学生の方々に心から感謝いたします。

参考文献

- 1) Wenden, A.L. and Rubin, J.: *Lerner Strategies in Language Learning*, Prentice-Hall International (1987)
- 2) O' Malley, J.M. and Chamot, A.U.: *Learning Strategies in Second Language Acquisition*, Cambridge University Press(1990)
- 3) レベッカ・オックスフォード: *言語学習ストラテジー*, 凡人社, 東京 (1990)
- 4) 伴紀子: *言語学習のための学習ストラテジー*, *日本語研究と日本語教育*, pp. 213-223, 名古屋大学出版会 (1992)
- 5) 宮崎里司・ネウストプニー共編: *日本語教育と日本語学習*, くろしお出版, 東京 (1999)
- 6) 西村よしみ: *日本語授業における学習者の認知過程と学習ストラテジー*, *筑波大学留学生センター日本語教育論集*, 8, pp. 153-173 (1993)
- 7) 村野良子: *高校留学生の自律的学習と学習ストラテジー*, *日本語教育*, 91 号, pp. 120-131 (1996)
- 8) 橋本洋二: *言語学習についての BELIEFS 把握のための試み*, *筑波大学留学生センター日本語教育論集*, 8, pp. 215-241 (1993)
- 9) 相場康子: *外国人留学生の勉学活動における日本と運用の成功の妨げになっているものは何か*, *日本語教育学会春季大会予稿集*, pp. 201-207 (2005)
- 10) 伊東祐郎: *日本語指導法: 個性と学習ストラテジーからの一考察*, *東京外国語大学留学生日本語教育センター論集*, 20, pp. 95-111 (1994)
- 11) 田中望・斉藤里美: *日本語教育の理論と実際*, 大修館書店, 東京 (1993)
- 12) 斉藤ひろみ: *自律学習能力を養うために教師は何かできるか*, *言語文化と日本語教育*, 16 号, お茶の水女子大学, pp. 1-11 (1998)
- 13) トムソン木下千尋: *学習契約書を使った自律学習の試み*, *第二言語としての日本語の習得研究第 2 号*, pp. 23-56 (1998)

Autonomous Japanese Language Learning Ability

- Insight from interviews with engineering foreign students -

APDUHAN, Kyoko

Faculty of Engineering, Kyushu Institute of Technology

The goal of this research is to develop didactics to help foreign students acquire an autonomous Japanese learning ability. We conducted interviews to foreign students and the person who has close contact to each student. The self-evaluation of Japanese abilities, the methods of studying Japanese and engineering subjects, as well as the responses to the learning environment were obtained from 14 learners. We analyzed each case considering the contact person's evaluation of the learner's Japanese ability, and classify the cases into two groups based on students' attitude in recognizing the problems in the self-evaluation, in taking action when faced with difficulties, and his/her aggressiveness to communicate.

Keywords: *autonomy in language learning, interview, language learning strategy*